

# CAMPUS HEALTH

2024.12

61 (2)

特集：LGBTQの正しい理解を深める



Japan University Health Association

# 目 次

## 巻頭言

巻頭言～大学保健管理—この大切な概念・理念をいかに次世代に伝えるか～ .....	守 屋 達 美	1
---	---------	---

## 特集 《LGBTQ の正しい理解を深める》

LGBTQ +への理解と支援のあり方 ～多様性・公平性・包摂性がある大学をめざす～	鈕 培	3
LGBTQ の脳科学的側面と多様なジェンダーの理解	康 純	10
「性同一性障害」の診療において精神科医に求められる対応と連携	深 尾 琢	16
性の多様性 (SOGI/LGBT) 対応ガイドライン策定への道のりから見えること ～ LGBTQ+ の正しい理解を深めるために～	宮 崎 博 子ほか	22

## 原著論文

新型コロナウイルス感染が体育大学生アスリートに与える身体的・精神的影響	廣 津 匡 隆ほか	28
CCAPS-iQAS の実用性に関する検討：再検査信頼性とユーザ満足度の観点から	堀 田 亮ほか	35
第7波・第8波流行下で COVID-19 に罹患した学生とその濃厚接触者となった学生の実態調査	工 藤 欣 邦ほか	41
重度やせの学生におけるロコモ・骨量減少・サルコペニアの有病率とリスク因子	佐 藤 弘 恵ほか	49
学生相談室における利用中断、キャンセルに関する注意欠如・多動症の影響 ～ウェブ会議システムでの面談の導入を踏まえて～	川 瀬 英 理ほか	56
看護学生が臨地実習中に受ける患者からの暴力に関する文献レビュー	岡 島 志 野	63
大学新入生の居住形態と University Personality Inventory テストの関連	高 橋 友 子ほか	70
入学時スクリーニング検査に基づく呼び出し面接の意義についての検討 —入学後1年以内のメンタルヘルス相談者の後方視的調査—	樋 口 尚 子ほか	77
大学生の視力～10年間の学生定期健康診断の横断的検討～	大 島 さちえほか	84
発達障害を持つ大学生への薬剤処方によりみられた臨床的变化 —修学支援の観点から—	石 井 映 美ほか	91
一般大学生を対象としたセンサリールームの効果に関する検討	塚 田 花 音ほか	99
コロナ禍が女子大学生のロコモティブシンドロームのリスクに与える影響 —2015年度入学生と2022年度入学生との比較から—	植 杉 優 一ほか	105

新型コロナウイルス感染症流行に伴う大学生の社交不安症状の変化	石原可愛ほか	111
新型コロナウイルス感染症が大学生活に与えた影響の検討 －メンタルヘルスとソーシャルサポートとの関連－	大場美奈ほか	118
保健指導に消極的な肥満学生に対する減量への動機づけと自己管理を促す方法 －行動療法を中心とした継続指導の試み－	菅美代子ほか	126
大学生向けのeラーニング教材を用いた心理・健康教育の試みとその効果	松下智子ほか	134
COVID-19 流行前後の大学生のメンタルヘルス	油谷元規ほか	144
ウィズコロナ時代における大学入学前の中国人留学生の抑うつ症状に関する調査	蘇心寧ほか	151
大学生の中退予防に向けた取り組み：学科による情報共有・個別化・連携化	大島寿美子ほか	157
コロナ禍で入学した大学新生の精神的健康度に影響を及ぼす因子	堤隆ほか	163
医学部生、看護学部生への女性のヘルスリテラシーを高める健康教育の実践	横田仁子ほか	170
ピア・サポーターによるファシリテーター養成プログラムの開発 －大学生のためのゲートキーパー養成プログラムの普及・拡大に向けて－	茅野理恵ほか	176
修学環境と健康状況に関する調査	田中生雅ほか	183
大学新生への心肺蘇生法に関する意識調査 - 2023 年度調査	田中優司ほか	190
<b>症例報告</b>		
卒業論文作成過程で一過性の不調を呈した大学生の1例 －学生相談における「ストレス反応」についての一考察－	高橋徹ほか	197
<b>報告</b>		
American College Health Association (ACHA) 2023 Annual Meeting 参加と UMass Boston 訪問の報告	中川克ほか	204
南フロリダ大学の Student Accessibility Services の視察報告	堀田亮	210
タンパ大学の Dickey Health and Wellness Center の視察報告	堀田亮	217
機関誌編集委員会からのお知らせ		224
あとがき		225

## 巻頭言

### ～大学保健管理—この大切な概念・理念をいかに次世代に伝えるか～

北里大学健康管理センター長 守屋達美

5年ほど前ですが、ある大学の保健管理センター長とお話をしたことがあります。「この大学保健という分野は、しっかり活動するとこれほど大変なものはない」というのが、その会話の結論めいたものでした。皆様も「これほど大変なものはない」というところを常日頃お感じになっているのではないのでしょうか。

保健管理／健康管理センターが行っている大学保健管理は、健康診断やワクチン接種にとどまりません。施設間の差はあるでしょうが、学生・教職員の心理支援、学内の健康管理に関するシステム構築への関与（コロナ対応、障害者支援など）、学生の自死予防対策、大規模災害対策（施設によっては大学病院と大学との橋渡しの役割を有します）、などの多岐に亘った活動があるでしょう。

これらの活動は、大学保健に直接携わる人だけでできるものではなく、全ての学内の関係者の方々と共に歩むことが大切です。キャンパス内には、たくさんの学生がいます、たくさんの教職員がいます。その人たちに向けて、有機的な大学保健管理を現実にするためには、大学各部署の皆様とともに行っていかななくてはならないと考えます。そのため、「大学に籍を置く全ての人が行うべき大学保健管理」という言葉を常日頃から発信するように心がけています。

そして、「継続は力なり」というありきたりの言葉がありますが、多岐にわたるセンターの活動も継続していくことが大切です。もちろん、継続に加えて発展がなければなりません。したがって、大学保健管理という手を出すと大変な、でも極めて重要な分野の活動・理念をいかに次世代に伝えていくか、ということの重要性を痛感し、このスピリットを皆で継続していければありがたいと思っています。

私事になりますが、私、守屋達美は、2024年度3月末日をもって北里大学を定年退職します。このCampus Healthの編集委員も2025年3月末をもって退任いたします。今までの約12年間に本当にたくさんの経験を積ませていただきました。大学病院の診療科にいた人間が大学所属という立場になり、様々なキャンパスを含む各学部の学生・教職員の皆様に接することができました。病院畑と言う極めて狭い世界にいただけでは、決してお知り合いにならなかった方々にお会いすることができました。かなり幅広い活動をさせていただいたと思います。また、たくさんのセンター員とお仕事をさせていただきました。ここで、接することができた全ての皆様に、そして過去・現在含めてセンター員全員に心から感謝したいと思います。ありがとうございました。

保健管理協会も人の入れ替わりもあり、本号が皆様の目に触れる頃には、2025年度に向けての様々な準備が始まっているはずです。新しい人々とともに、協会は新しい活動を始めるでしょう。一方、保健管理／健康管理センターは大学という組織の中では、微力かもしれません。でも、スタッフの方々は、大学に籍を置く全ての皆様とともに大学保健という道を継続して歩いていってください。

米国のある医科大学の門には、「Not 4 years, but 40 years」という言葉が掲げられています。これは、医師の研鑽というものは医学部の4年間のみではない、その後の40年間をどう過ごすのが重要である、という意味のようです。

大学保健の分野は、大学生、そして彼らを取りまく教職員がいる限り、永遠のものです。したがって、  
**Not 4 years, but 40 years, AND FOR NEXT 40 years!**  
といったところでしょうか。

今後の大学保健分野の発展を祈念して、私の巻頭言とさせていただきます。